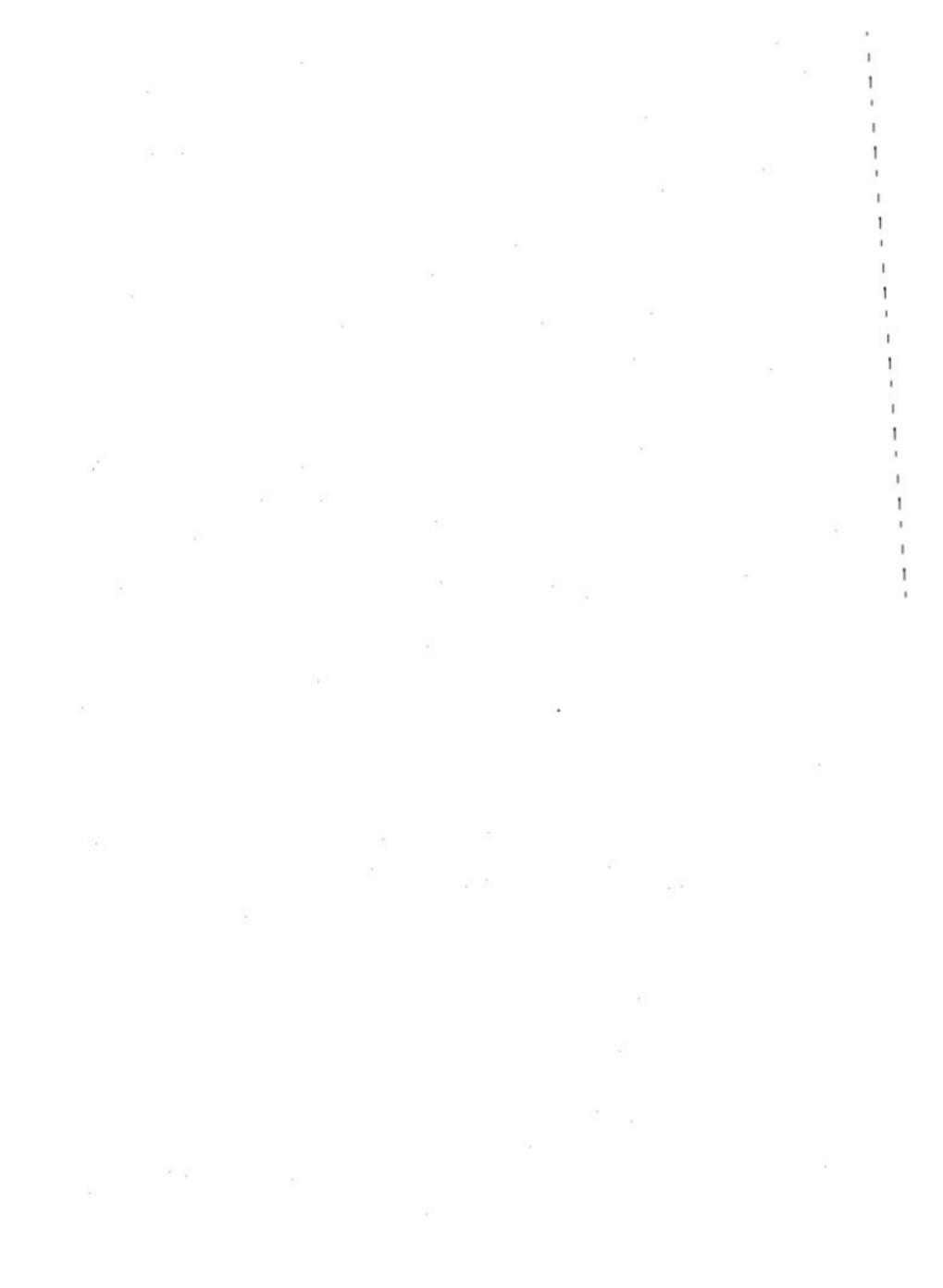


史跡横須賀城跡VI

平成元年度保存修理事業概報

1990

大須賀町教育委員会



史跡横須賀城跡VI

平成元年度保存修理事業概報

1990

大須賀町教育委員会

例　　言

1. 本書は静岡県小笠郡大須賀町に所在する史跡横須賀城跡の平成元年度保存修理事業の概報である。
2. 保存修理事業は国・県の補助金を受けて大須賀町教育委員会が実施した。
3. 保存事業に伴う発掘調査は斎藤忠（大正大学名誉教授）、小和田哲男（静岡大学教授）高瀬要一（奈良国立文化財研究所）の指導のもと、大須賀町教育委員会の木佐森道弘が担当し、調査に関する事務は大須賀町教育委員会事務局があたった。
4. 本書の執筆分担は以下のとおりである。
5. 本書の編集は木佐森がおこなった。
6. 発掘調査に係わる資料は大須賀町教育委員会が保管している。
7. 調査ならびに本書の執筆にあたり、下記の方々のご協力、ご指導を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

内藤昌（名古屋工業大学教授）・龍口克己（東京工業大学教授）・水島和弘・惟村忠志

発掘調査参加者

大石猪太郎・藤田長吉・戸塚重一・岡田賢一・藤山喜代志・杉山朝雄・戸塚庄八・服部三郎・井口金一・宇佐美新・鈴木藤市・鈴木春一・太田光男・進土高逸・金丸久子・佐々木はるゑ・加藤きぬ枝・杉山てい・杉山みつ代・名倉わか・竹内ふく・鈴木はつゑ・船木志都枝・佐野いと・堀江つね・佐藤芳江・伊藤サカエ・植村とみよ・赤堀一江・村松愛子・柳原祥子・田中ゆき

本文目次

| | | |
|-----|-----------------------|----|
| 第1章 | 平成元年度の事業概要 | 1 |
| | 第1節 土地の公有化事業 | 1 |
| | 第2節 発掘調査事業 | 1 |
| | 第3節 環境整備事業 | 1 |
| | 第4節 保存管理事業 | 2 |
| | 第5節 整備委員会及び保存に係る会議等 | 2 |
| | 第6節 現状変更の一覧及び固定資産税の減免 | 2 |
| 第2章 | 発掘調査の概要 | 3 |
| | 第1節 調査に至る経緯経過 | 3 |
| | 第2節 調査の方法 | 4 |
| | 第3節 遺構について | 9 |
| | 第4節 遺物について | 16 |
| 第3章 | まとめ | 23 |

挿図目次

| | | |
|------|--------------------|----|
| 第1図 | 横須賀城跡位置図 | 3 |
| 第2図 | 発掘調査区域図 | 5 |
| 第3図 | 天守台跡・グリット・トレチ設定図 | 7 |
| 第4図 | 本丸南斜面・西の丸東斜面発掘区設定図 | 11 |
| 第5図 | 本丸南斜面上段石垣平面図・立面図 | 13 |
| 第6図 | 本丸南斜面下・下段石垣根石列平面図 | 15 |
| 第7図 | 出土瓦拓影図(1) | 17 |
| 第8図 | 出土瓦拓影図(2) | 19 |
| 第9図 | 出土瓦拓影図(3) | 20 |
| 第10図 | 出土瓦拓影図(4) | 21 |

図版目次

- 図版 1 天守台跡調査前状況（南より） 本丸南斜面調査前状況（南より）
図版 2 天守台跡遺構全景（南より） 本丸南斜面調査状況（西より）
図版 3 天守台跡中央据石（南より） 天守台跡中央据石抜取り痕（南より）
天守台跡F-10区石列・石垣（南より）
図版 4 天守台跡F-10区石列・石垣と中央トレゾ（南より）
天守台跡F-10区石列・石垣石積み状態（南より）
天守台跡F-10区石列・石垣東側部分（南より）
図版 5 天守台跡F-9区石列（東より） 天守台跡F-9区石列（南より）
本丸北側土壘状部分（西より）
図版 6 本丸南斜面中央発掘状況（南より） 本丸南斜面東側発掘状況（西より）
本丸南斜面上段石垣検出状況（南より）
図版 7 上段石垣埋没状態（南より） 上段石垣前下層遺物検出状況（南より）
上段石垣下層遺物検出状況（東より）
図版 8 上段石垣前堀瓦検出状況（南より） 上段石垣前堀瓦出土状況
上段石垣前丸瓦出土状況
図版 9 上段石垣前櫛松文入り軒丸瓦出土状況 上段石垣前堀瓦出土状況
上段石垣前堀瓦出土状況
図版10 上段石垣完掘状況・全景（南より） 上段石垣完掘状況・西側部分（南より）
上段石垣完掘状況・東側部分（南より）
図版11 上段石垣完掘状況・全景（東より） 上段石垣完掘状況・西側部分（北より）
上段石垣完掘状況・西側屈曲部（西より）
図版12 上段石垣完掘状況・東側部分（西より）
上段石垣西側屈曲部石積み状態（東より） 上段石垣西側部分（南より）
図版13 上段石垣東側部分根石据方状況（南より）
上段石垣東側部分根石据方状況（南より）
上段石垣東側部分根石据方状況（南より）
図版14 上段石垣東側部分根石据方状況（南より）
上段石垣東側前面玉砂利検出状況（西より）
上段石垣東側前面玉砂利検出状況

- 図版15 下段石垣検出状況（南より） 下段石垣と裏込めぐり石埋没状況（西より）
下段石垣裏込めぐり検出状況（西より）
- 図版16 上段石垣と下段石垣ぐり石（南より）
西の丸東斜面下石垣検出状況（東より）
西の丸東斜面下石垣埋没状況（南より）
- 図版17 出土遺物 1
- 図版18 出土遺物 2
- 図版19 出土遺物 3

第1章 平成元年度の事業概要

第1節 土地の公有化事業

本年度は、昭和63年度に実施した外堀跡の土地先行取得事業の利子の償還をおこなった。

平成元年度利子償還額

| | |
|-------|--------------|
| 事業費 | 9, 114, 903円 |
| 国庫補助金 | 6, 185, 000円 |
| 県費補助金 | 515, 000円 |

第2節 発掘調査事業

平成元年度の発掘調査は、天守台と本丸南側斜面についておこなった。

天守台部分については、天守閣と天守台の範囲の確認、古文書に記述のある天守台門等の建造物の検出等を目標とした。

本丸の南側斜面については石垣跡、登り口跡等の検出を目標とした。

第3節 環境整備事業

平成元年度の環境整備事業は、昭和63年度に発掘調査の終了した本丸跡の平坦面についておこなった。

実施にあたって、発掘調査で得られた成果を基に基本的な設計をおこなった。その後工事の施工までの期間に整備委員等の指導を受けて、部分的な修正を数度おこない、業者に発注して施工した。

整備地の周囲にはサザンカを一列に植栽して堀跡を表し、前年度に整備の済んだ西の丸跡との境界部分にはツゲを植栽して門跡を表示した。

整備地の中央部分には東西に園路を設け、見学者の利便をはかる事とした。舗装材料は石灰岩ダスト混合土と生石灰により舗装をおこない、三和土（たたき）状の舗装とした。これは城跡公園にふさわしい舗装材として選定したものであり、雨天等にも滑りにくい材料である。また園路の縁は直径15cm程度の丸太木材により縁取った。

整備地の中央部分北側に土坑が三ヶ所検出されている。この遺構の復原表示もおこなった。その表示方法については、土坑を表現するためにくぼみを作つて表現する方法など、その表示方法や材料の選定等、度々協議したが、くぼみをつくつて土坑を表現する方法では維持管理が大変なことなどから、今回実施した表示方法を採用した。その方法は花崗岩の小ブロックを丸く並べて縁取りとし、内側はアンツーカーたたき仕上げで表現する方法で排水のため中央部分を周囲より1cm程度高くした。また、今後表示方法等の説明板を設置していく事とした。

遺構が検出されなかった部分については野芝を全面張つて整備した。

第4節 保存管理事業

整備の済んでいる部分の植栽樹木等の管理と未整備地の草刈りについては、業者委託によりおこなった。ただし、公園全体の除草については教育委員会が直営でおこない、梅園の管理については大須賀町郷土研究会にお願いしている。

その他、城跡公園のトイレの清掃、ごみくずかごの片づけ等については、日赤奉仕団等の地元のボランティア団体にお願いしている。

第5節 整備委員会及び保存に係わる会議等

整備委員会と保存推進委員会をそれぞれ2回開催して、発掘調査、環境整備等の保存整備事業全般にわたって協議検討をおこなった。

会議の日程は下記のとおりである。

| | |
|-----------|------------|
| 平成元年12月1日 | 第1回保存推進委員会 |
| " 12月4日 | 第1回城跡整備委員会 |
| 平成2年3月4日 | 第2回保存推進委員会 |
| " 3月24日 | 第2回城跡整備委員会 |

第6節 現状変更の一覧及び固定資産税の減免

平成元年度の現状変更の申請は下記のとおりである。

| | |
|------------|----|
| 住宅建設 | 2件 |
| 住宅解体撤去 | 1件 |
| 建造物移転（忠靈殿） | 1件 |

以上の申請のうち、住宅建築2件及び前年度申請の住宅改築に伴う現状変更申請一件の計3件について、事前の発掘調査をおこなった。

その結果調査として、石垣状石列造構、小門状造構、建物跡と思われる礎石状造構、塀の基礎石列と考えられる石列状造構、井戸枠状造構等数々の造構を検出した。

忠靈殿（戦没者慰靈のための慰靈殿）の移転については今回の保存修理事業に伴う発掘調査のための移転である。

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯経過

1. 調査に至る経緯

本年度の発掘調査箇所については、整備計画と前年度までの発掘調査成果にもとづき、保存推進委員会、整備委員会等で検討をおこなって天守台跡、本丸南側斜面に決定した。

天守台跡には戦没者の慰靈のための忠靈殿が建っていた。したがって、この移転が済んでから調査に入る事となった。期間は平成元年12月12日～平成2年3月29日までの約4ヶ月間にわたっておこなった。

体制は以下のとおりである。

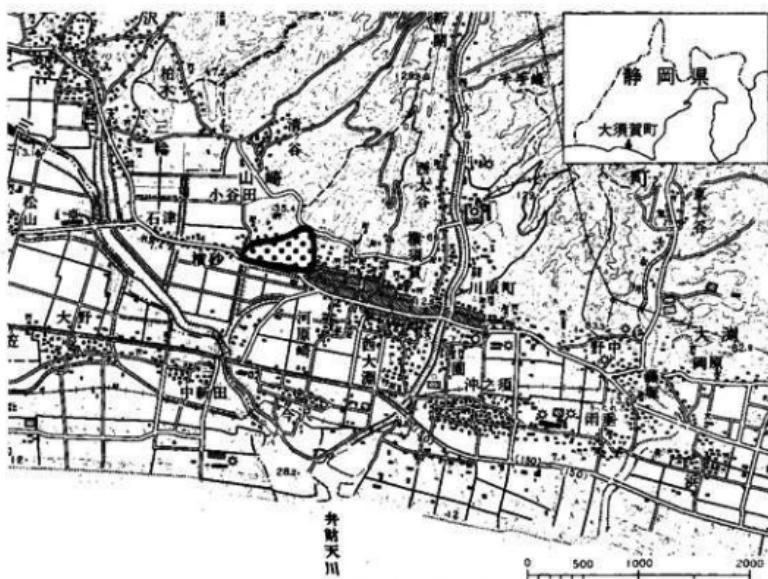
調査主体 大須賀町教育委員会

調査指導 斎藤 忠 (大正大学名誉教授)

小和田哲男 (静岡大学教授)

高瀬 要一 (奈良国立文化財研究所)

調査事務 大須賀町教育委員会事務局



第1図 横須賀城跡位置図

2.調査の経過

当初は9月から開始する計画であったが、調査地内に建っている忠靈殿の移転が予定より大幅に遅れたため、発掘調査の開始についても大きく遅れ、年度も後半の12月から開始する事となった。また2月中は雨天が続き作業能率が大変悪く、調査の後半に大変苦労した。

調査経過の概要は以下の日誌のとおりである。

調査日誌抄

- ・平成元年12月12日 忠靈殿部分重機による表土剥ぎ。
- ・ " 12月15日 トレンチ掘削
- ・ " 12月18日 瓦溜まりを検出する。
- ・ " 12月27日 元年仕事納め。
- ・平成2年1月8日 平成2年仕事始め。
- ・ " 1月9日 天守台部分全面掘り下げ。
- ・ " 1月17日 本丸南斜面掘り下げ。
- ・ " 1月23日 瓦溜り掘り下げ。
- ・ " 2月14日 天守台中央部の石垣根石部分掘削。
- ・ " 2月19日 天守台南斜面石垣検出作業
- ・ " 2月28日 天守台西土壘状部分全面表土剥ぎ。
- ・ " 3月8日 本丸南斜面下段石垣部分掘削。
- ・ " 3月10日 本丸南側斜面中央部下段石垣検出
- ・ " 3月17日 土壘埋め戻し作業
- ・ " 3月26日 本丸南斜面西側部分石積み状遺構検出。
- ・ " 3月29日 現場調査終了

第2節 調査の方法

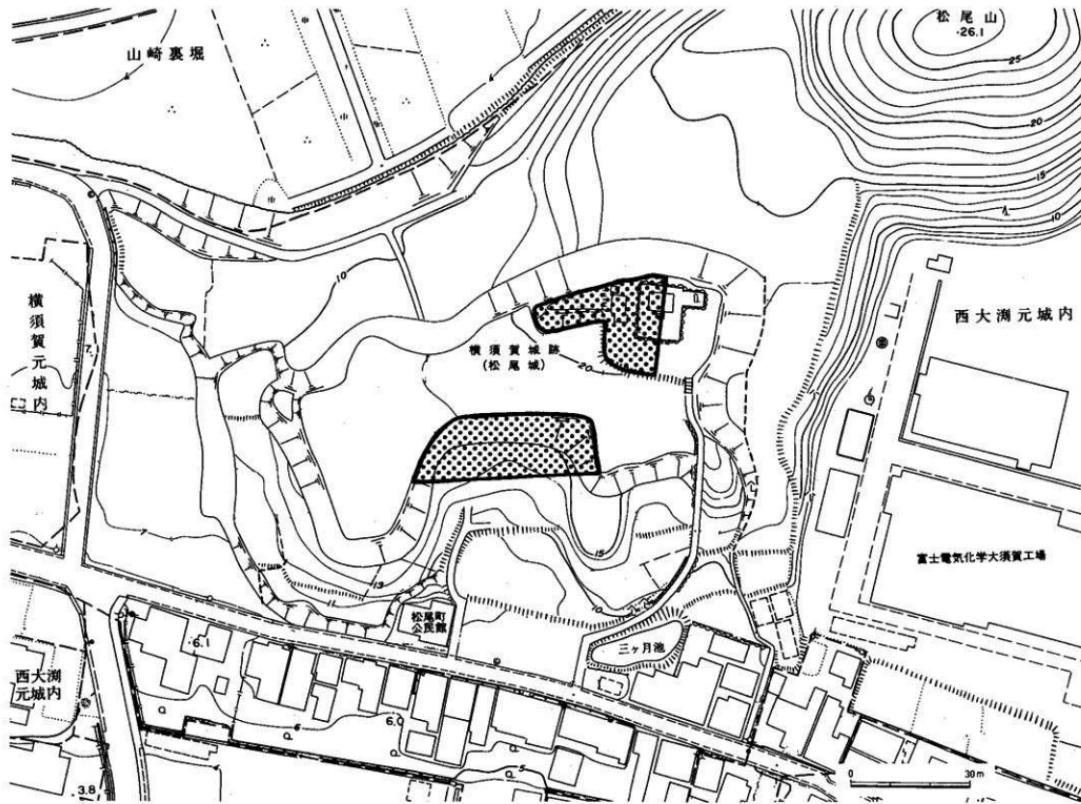
発掘区は、前年度のグリットに合わせて設定した。

最初に、天守台部分に重機を入れ、植木、芝等を掘取り撤去した。

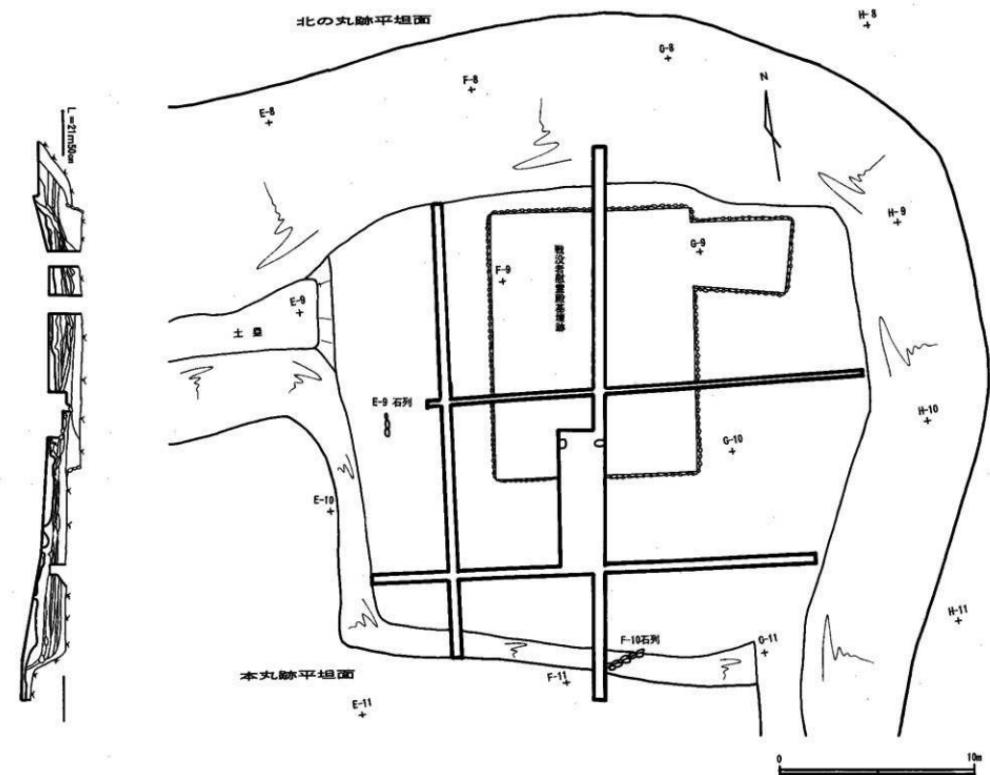
その後、西側と中央部分に幅1.5mのトレンチを入れ、土層の観察と遺構の残存状況等の確認をおこなった。その結果、当初の予想より遺構面までの深さが厚く全面的に調査するためには、期間等の余裕がないと判断し、西側部分のみ掘削をおこなった。

本丸北側の土壘状部分については、昭和59年度の調査で掘削したトレンチを再掘削して土層観察をおこない、その後全面的に表土を排除して遺構の確認をし、写真撮影をおこなった後、埋め戻した。

本丸南側斜面部分については、前年度2ヶ所にトレンチを設定し、石垣を検出している。そこで再度トレンチを掘削し、遺構までの深さを確認しながら重機により全面的に表土を排除して調



第2図 発掘調査区域図



第3図 天守台跡グリッド・トレンチ設定図

査を進めた。埋め戻しについては地形的な制約から完全な埋め戻しが困難なため、石垣部分を土壟で覆って、その後は多少埋め戻す程度で自然におちつくまで当分の間ビニールシートで被覆保護する事とした。

第3節 遺構について

1.天守台部分

この部分は見晴らしのよい城の中心地という事で、過去に公園造成、忠靈殿の建設等の大規模な削平造成工事を度々受けており、遺構の残存状態は極めて悪かった。特に天守台部分については現在みられる本丸北側の土壠状部分の高さまで、盛土がされていたと考えられる。つまり本丸の平坦面から3m以上の高さがあったわけである。しかし、現状は平坦面から1m50cm程度の盛り土しかない。したがって、この部分については厚さ1m以上の削平工事がおこなわれたと考えられる事から、天守の建物跡は破壊され残っていないと考えられる。実際、今回の調査において、盛り土の削平状態は観察できたが、その他は、何らの遺構も検出されなかった。また天守台全体についても建物の取り壊し時のものと考えられる瓦・壁土・礫等が厚く堆積していて、その上面にはさらに数回の大規模な整地による整地土層が厚く堆積している。

以上述べたとおり、表面から遺構面と考えられる部分まで1m以上の堆積物がある事が判明した。したがって、年度内の調査による天守台全体の解明は難しいと判断し、天守台全体の発掘調査および天守台の解明については翌年度継続しておこなう事となった。

以下、天守台の各部分について述べる。

天守台跡

この部分(E-9区・F-9区・E-10区・F-10区)には天守の基壇と石垣があったと考えられる。その範囲を確認する事が、今回の天守台跡の調査の大きな目標であった。前に述べたとおり基壇の上部は削平されているといわれていたため、天守建物の検出は難しいと考えていたが、天守の基壇の範囲については石垣の根石列が検出できればおのずと確認できると考えた。しかし、実際に調査をおこなった結果は部分的に掘石状の丸礫を検出したのみで、はっきりとした根石列は検出できなかった。この掘石が天守の基壇の南側の石垣の根石である可能性が高いと考えられるが現状では断定する事が出来ない。次年度、この部分についても全面的に発掘調査を実施する計画であり、はっきりとした石列の検出を期待したい。今回検出した掘石は長径80cm程度の小笠山礫層中にみられる丸礫を利用してつくられている。

F-10区石列・石垣状遺構

天守台の南東の法面部分で、石垣状の遺構と入口状の石段状の遺構を検出した。これらの遺構は本丸の平坦面から天守台に上がる入口跡とそれに附属する石垣とも考えられる。遺構は天守台の表面を覆う厚さ50cmほどの砂利質の整地層の下から検出されている。石垣は現状で3段が確認できる。石材は小笠山礫層中にみられる長径20cm~30cmの砂岩質の丸礫が使われていて、石積みの方法はきわめて特徴的である。この石垣の東側部分には緩やかな傾斜で天守台に上がるスロ-

ブ状の入口が考えられる。このスロープに取り付けるために石垣は東に行き次第、その傾斜を緩め、登り口状のスロープと接続する構造となっている。

今回の調査ではその全体を掘削せず次年度引き続き調査する事となった。その際に全容が明らかになると考えられる。

E-9区石列状遺構

E-9区の北側部分で南北に連なる小規模な石列を検出した。この付近は天守台の石垣の西側部分であることから、天守台の西側ラインを探る手掛かりになる可能性が期待できる。その他E-10区の天守台の西側部分で長径1m程の据石を検出しており、廃城時の記録にみられる天守台門等の建物跡の可能性が考えられる。

本丸北側の土壘状部分

この土壘の土層観察は、昭和59年度の調査でおこなわれている。その報告のなかで、土壘上に平坦面が確認でき、建物跡の存在の可能性が指摘されている。そこで、今回の調査ではこの部分の整備に先立ち、昭和59年度に入れたトレーナーの再掘削による土層観察と、全面的な遺構検出を試みた。その結果上面にはあきらかに平坦面が認められるが、堀跡等の建物跡は検出できなかった。現場は調査終了後、埋め戻しをおこない、張り芝工事をおこなった。

2. 本丸南側斜面部分

前年度の調査時に本丸南側斜面の上部において、石垣を部分的に検出している。そこで今年度の調査で本丸南斜面の上部一帯の全面的な遺構検出をおこなった。現状で確認できる石垣の高さは西側で5段程度である。石垣の前面には幅3mほどの前庭部状（テラス状）の平坦面があり、その南側は急傾斜面となっている。

この斜面には、石垣の裏込めのぐり石と考えられる拳大の丸礫が斜面に張りついたような形で検出されている事から石垣があったと推察される。実際、斜面の下場の据部分には、石垣の根石と考えられる長径50cm程の丸礫が東西方向（斜面に沿うように）に並んで据えられている。

ここでは便宜上前述の石垣を上段石垣、後述の石垣を下段石垣と呼ぶ事とする。

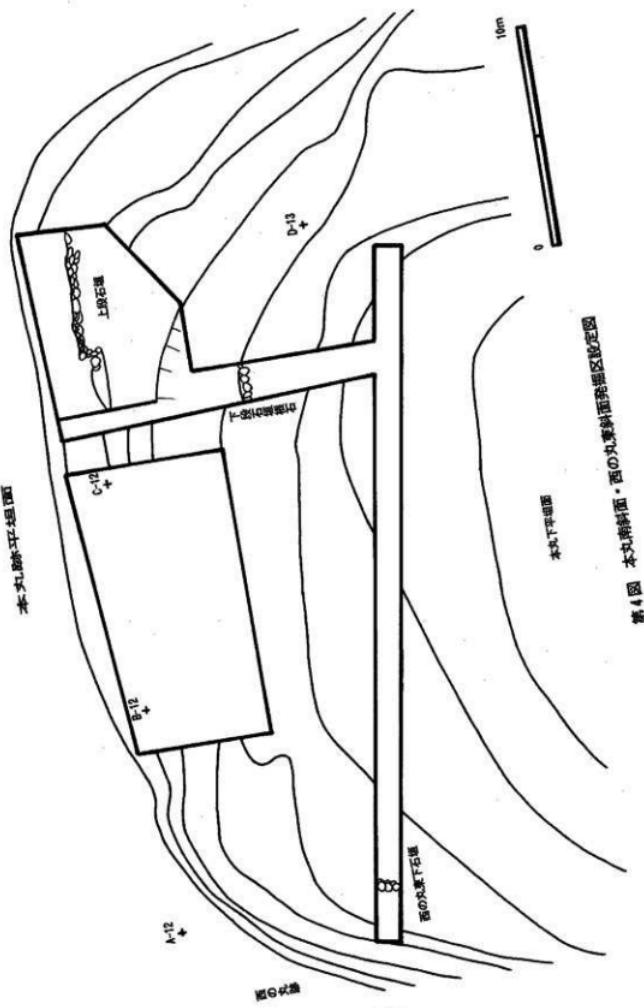
上段石垣

この石垣は前述したとおり高い部分で5段程度の石積みで作られている。石と石の間は粘土等で埋められておらず、空間があつて目地を埋めるような割り石もほとんどみられなかった。また石の積み方が西側と東側では異なっている。

西側部分では扁平な面を上にして長軸の線を奥に使って短軸の側面が外側に出るような形で積まれている。したがって見た目ではこぶりの丸石を水平に積み上げただけのような感じに見え、また、空間が多く、崩落し安く見えるが、実際は奥に向かって長く据えられているので、見た目よりしっかりしていると考えられる。崩れやすい丸石をいかに積むか工夫の程が知られる。

東側部分は偏平な面を前面に出す形で、また、東側に傾斜した地形（東に向かって上がっている）に合わせ、東に上がった斜めの積み方がみられる。

最下段の石は根石となる石であり、他の上部の石よりおおぶりの石を使っている。またこの根



第4図 本丸跡下・西の丸跡下地盤試験結果

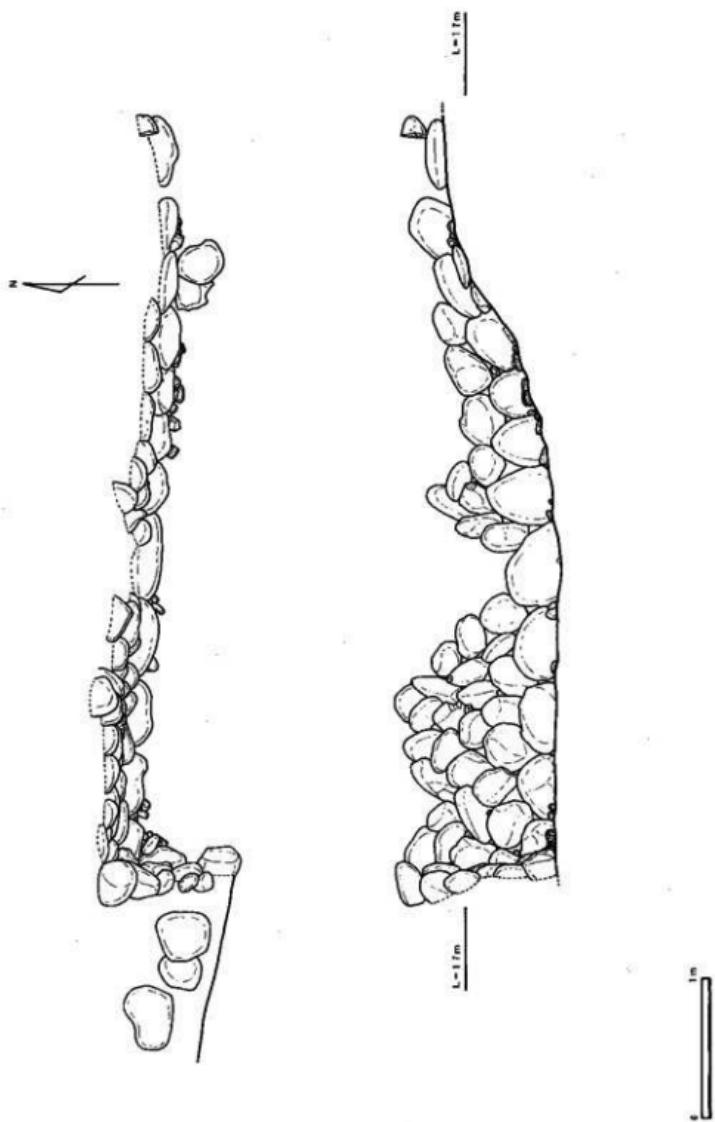
石を据えるにあたって、その基部に割り石の小片を挟み込むようにして据えている。この根石が据えられている平坦面は小笠山躑躅である。この石垣を積むために、小笠山躑躅まで削りだして平坦面を作り、その平坦面上に据えている事がわかる。現状では5段積みほどの石垣であるが、当時は本丸の平坦面まで石垣が達していたと考えらる。石垣の上端から本丸の平坦面まで、3mほどの高さがあることから、当時の石垣の高さは4mほどであったと推定される。したがって根石に相当の重量がかかり埋め土層では耐えられないため、地山層まで削り出してその上に根石を据えたと考えられる。

石垣の東端の前面の平坦面には、天竜川または海岸で採集されたと考えられる（小笠山躑躅中には見られない）径3cm～4cmほどの扁平な小玉石（玉砂利）が一面に敷かれた状態で検出されている。このような扁平な玉石は今までの調査においても崩落土、整地層中に単独に見られる事はあったが、今回のように当時の生活面上に広く敷かれた形で検出されたのは初めてである。この扁平な玉石については以前から色々な考え方があった。玉石の状態からは神社の境内等に広く敷かれている玉石を連想する。しかし城内の平坦面全体に広く敷かれていたとするには今まで検出された量が少なすぎる。したがって、以前から、この玉石は城内の通路等に敷かれていたものの一部が斜面等に流れ落ちたりして堆積したものではないかと言っていた。今回検出された玉石は上部の本丸平坦面から流れ落ちたものとは考えにくく、この平坦面に敷かれていた玉石敷の一部と考えられる。この事からすると、この部分に何らかの通路が想定される。石垣との位置関係からすれば、石垣の前面の平坦面を東西に走る通路が想定できる。そこで、この玉石敷の東と西の続きを探った。西側については通路状の平坦面はみられるが玉石敷は検出されなかった。東側についても玉石敷あるいは通路状の平坦面の検出を試みたが検出はできなかった。石垣の構造が西側と東側では違う事は先に述べたが、この変換ラインで平坦面の構造も変化している。（平坦面の変化に応じて石垣の積み方が変化しているのである）西側部分はほぼ平坦面を成しているが、東側部分は、この変換ラインを境に東に向かって次第に上がり勾配に傾斜している。そしてこの変換ラインの近い部分に傾斜方向に直角になるように石列状の石が6個ほどみられる。これはこの傾斜面を上がる石段の痕跡の可能性も充分考えられる。この事も合わせて考えると、この石垣の前面に東西方向に行き来する通路的なものの存在を考える事ができる。特にこの平坦面が一様な傾斜をもって東に上がっているでもなく、一様に平坦でも無い、この変換ラインを境に東側が上がっている。この事に、この部分の構造を解く鍵がありそうである。西側部分と南側部分が崩落して完全でないことから判断が難しい今回は、この部分の結論は保留としたい。

石垣の全体の構造は東側から真っ直ぐ西に向かって作られ、途中から直角に南に折れ曲がった構造をしていて、屈曲した部分の南側は途中で途切れている。この検出状況から、石垣が南に連続していたのではないかと考えられる。この屈曲部分の性格についても今後検討していく必要がある。

石垣の中央部分は崩落したような状態を示している。石垣に使われたと思われる長径30cm～40cmの丸砾や石垣の裏込めのぐり石のような拳大の丸砾が石垣上に覆いかぶさるように堆積してい

第5圖 本丸南斜面上段石垣平面圖・立面圖



た。この崩落土の下からは一辺が40cm以上もある平瓦や丸瓦が検出されているが、その検出状態は平坦面上に平らに伏せたような状態や石垣に直接斜めにもたれ掛かるような状態で埋没していた。この状態は、石垣の上部（本丸の南裾部）にあった建物から瓦が崩落し埋没した状況が推測できる。現在残っている城の古絵図によると石垣の上部に白壁の塀が描かれている事と、今回検出された平瓦が塀の瓦である事から考え、地蔵などの被災時に石垣の直上にあった塀の瓦が石垣の前面に崩落し、その後、石垣 자체が崩落して埋没し、修復不可能としてそのまま埋めたてられたのではないかと考えられる。この状況から地震等の災害により被害を受けた状況が推測できて興味深い。被災の時期については崩落土中の遺物が少ない事等から特定する事は難しいが、櫛松文入りの丸瓦の破片が1点出土している事から考えて、西尾氏の入封した天和2年（1682）を過らない事は確実である。さらに、江戸時代の天明年代（1781～1789）頃に書かれたと推定される『横須賀根元歴代明鑑』のなかの西尾忠尚が城主だった時の記載として「……丹後の守様ヨリ以来の名君ニテ当御城も方々御普請然中塀の屋根昔ハ小板蓬目成りしを瓦ニ被遊其外御多門御長屋御馬屋迄不残瓦ニ成申候……」とあるこのことから西尾忠尚が城主だった正徳3年（1713）～宝暦10年（1760）の期間のうちの中期以降でありその時期を逆上することはない。この次期以降に当地方を襲った地蔵としては、幕末の安政の東海大地震がある。いくつかの文献によればこの地震で横須賀城と領内は甚大な被害を受けている。今回の石垣に関連する本丸部分の記述では、石垣は残らず崩壊、囲い塀は残らず倒壊と記述されている。この事から今回検出された石垣の崩落の時期は安政の大地震の時のもの可能性が高いが、明治6年（1873）の廃城時に投機されたとの考えもできる。

下段石垣部分

下段の石垣は多量の廃棄瓦と丸瓦の下から検出されている。上段石垣の前面の平坦部分から続く斜面の裾部分に沿うように東西に並んで検出されている。この石列の石材は他の造構と同じく小笠山疊層中の長径40cm～50cmの砂岩質の丸瓦をつかってつくられている。石の掘え方は石の長軸の方向を奥向きに使い、石の上面は必ずしも扁平な面ではなく、かえって扁平面を下向きして凸面を上向きにして掘えられている。検出された石列は石垣の最下段の根石と考えられる。中央に入れたトレンチで二段積みの部分があるがその他はすべて一段のみである。しかし斜面下場の裾部分に一つ並べられている事と、その斜面部分に石垣の裏込めの石と考えられる拳大の丸石が斜面に張りつくような形で分布している事から考えると、石垣の根石列ではないかと考えたい。その規模については斜面の裏込めの石が、前述の上段石垣の平坦面まで達しているから、この平坦面まで石垣があったと考えられる。根石から平坦面まで3mの高さがありこの程度の高さの石垣が存在したと考えられる。しかし、現状では一段分の石列しかない。地震等の自然災害により根石だけを残して上部の石がすべて崩落してしまったとは考えにくいので、明治初年の廃城時あるいはそれ以前の改築時に人為的に抜き取られ他に転用されたと考えられる。明治初年の廃城時には石垣のほとんどが抜き取られて民間にもついていかれたとの事であり、民家の土台石や庭の飛び石につかわれたと言う。実際、つい30年ほど前まで付近の人が城跡内の丸石を持ち去っ

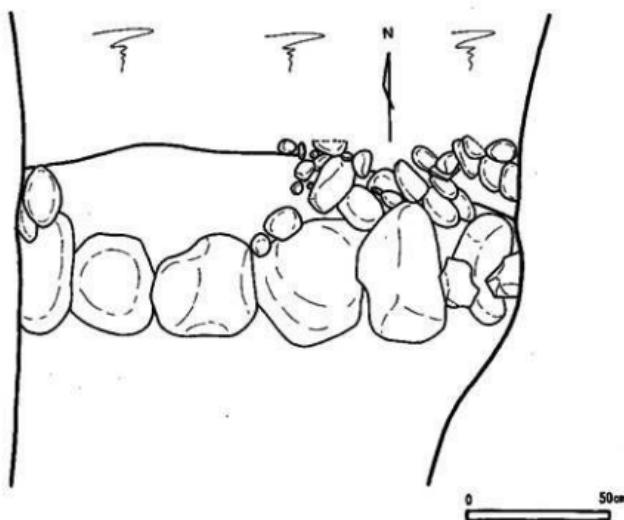
ては家の土台石などに利用したと、一度ならず聞いている。

西の丸東側斜面部分

本丸の南斜面下の平坦面に東西にトレンチをいれて遺構の検出をおこなったところ、トレンチの西端部分の西の丸東側斜面の裾部分で、石垣を検出した。遺構は小笠山礫層中に産出する長さ40cm程度の大ぶりの砂岩質丸礫を使ってつくられていて、偏平な面を上面につかって据えられている。石と石の間の目地は粘土などによって埋められておらず割り石を間に挟んでつくられている。現状では二段分の石積みしか検出されていないが、裏側の地山の状況等からすれば、更に二段から三段の石積みが考えられる。古絵図によてもこの部分には高い石垣は描かれていないこの事から考えても高くて、四段から五段程度の低い石垣であったと考えられる。以上の事からこの部分の石垣は、西の丸の東側斜面の法面の崩壊を防ぐために築かれた石積みではないかと考えられる。石積みの方向は南北方向に築かれていることから本丸南斜面の下場部分で東に折れて、前述した本丸前の石垣と接続している可能性が考えられる。

その他のトレンチについて

今回の調査では、本丸の前面部分から本丸の台地上に上がる登り道跡の検出についても期待して西側と東側の両コーナー部分にトレンチを設定して遺構を探った。しかし登り道に関連する遺構は検出されなかった。



第6図 本丸南斜面下段石垣根石列平面図

第4節 遺物について

1. 軒丸瓦

1 瓦当内区に右巻きの三つ巴文、外区に8個の連珠を配する軒丸瓦である。丸瓦部から瓦部にかけて反り上がることから鳥糞瓦の可能性がある。胎土は灰色で砂は少なく、全体の色調は配黒色で、焼成は極めて良好である。瓦当表面に離れ砂が顕著に付着する。瓦当部分の裏面と側面はなで調整、丸瓦部分の上面はへらによる調整がなされている。

2 瓦当内区に左巻きの三つ巴文、外区に多数の連珠を配する軒丸瓦である。丸瓦部から瓦当部にかけて反り上がることから鳥糞瓦の可能性がある。瓦当部の2/3ほどが残る。胎土は灰白色、砂は含まないが瓦片のような黒色の不正形の粒子をふくむ、また胎土に空間が多い。色調は黒色で焼成は良、瓦当部の側面内側、丸瓦部の外側はなで調整、丸瓦部内側に糸目が残る。

3 瓦当の内区に左巻きの三つ巴文、外区に連珠を配する。瓦当に離れ砂が付着する。焼成前に瓦当面が圧迫されたらしく、上部がひずんでいる。胎土は黄赤色で砂は少なく、焼成は良い。

4 瓦当内区に左巻きの三つ巴文、外区に15個の連珠をつける。瓦当面に砂の付着がみられ離れ砂の可能性がある。胎土は黄褐色で砂が多い。外観の色調は灰黒色、表面があれて調整痕は観察できない。丸瓦部から瓦当部にかけて反り上がることから鳥糞瓦の可能性がある。

5 瓦当面に、城主西尾氏の家紋である櫛松文が付く、二種類ある櫛松文のうち新しいタイプと考えられる櫛の歯が9本歯の櫛松文が付いている。瓦当表面に離れ砂が付着する。胎土は白色で砂は少ない。外観の色調は灰黒色で、焼成は良い。瓦当の周囲と裏面はなで調整され、丸瓦部の外面に縦方向のへら調整がされ、内面は無調整である。

6 瓦当面の内区に11弁の陰刻の菊文が付く、瓦当面に離れ砂が付着する。瓦当部分だけで丸瓦部は残らない。胎土は灰赤色で砂が多い、焼成は良くなく軟質である。外観の色調は灰黒色で肌が荒れて調整痕はわからない、裏面に丸瓦部との接合のための放射状の櫛目が残る。

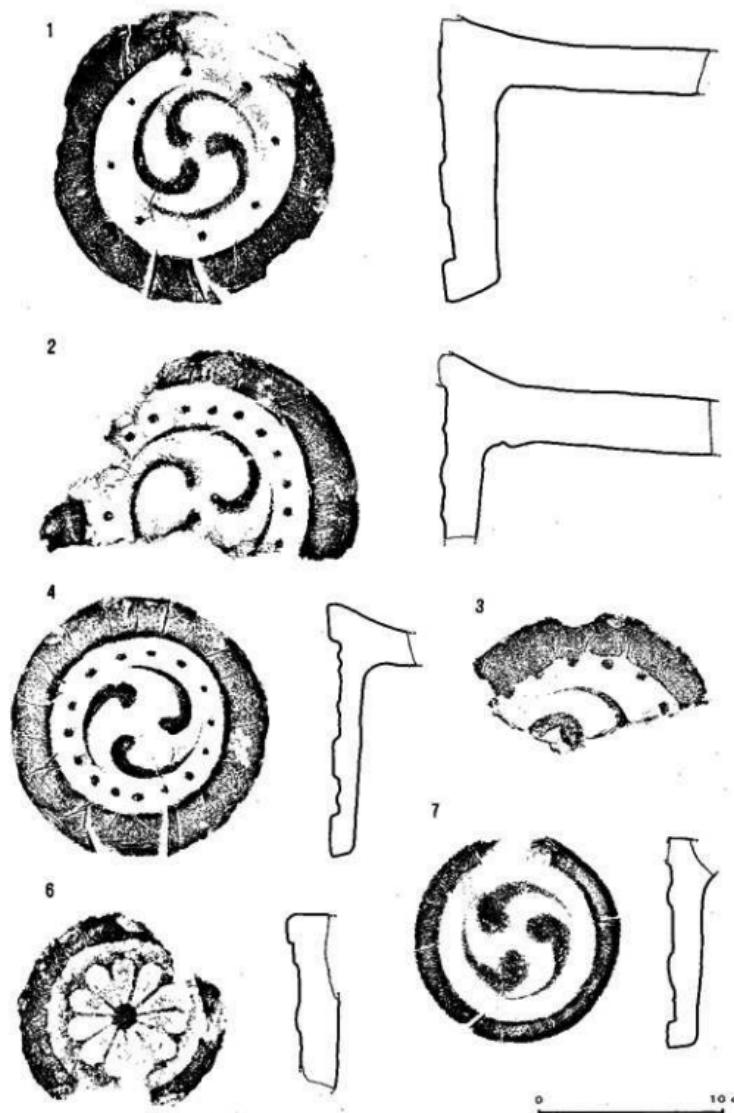
通常の軒丸瓦より径が小さく菊丸瓦の可能性もあるが、菊丸瓦より径が大きい事から、軒丸瓦の分類にふくめた。

7 瓦当面に右巻きの三つ巴文をつける。胎土は灰黄色で砂が多く焼成は普通で軟質である。外観の色調は黒色である。瓦当表面に雲母が付着する。

2. 鳥糞瓦

軒丸瓦にいれた1、2、4の瓦は鳥糞瓦の可能性がある。

8 瓦当に城主西尾氏の家紋である櫛松文がつく、櫛の歯の本数は9本歯である。胎土は白色で砂が多い。焼成は良好である。瓦当表面に雲母が付着する。瓦当周囲と裏面はなで調整、頭部の外面の上面はへら調整となで調整がされている。下半部分はなで調整のみがなされている。頭部の内面には、円柱状の型に板状の粘土板を巻き付け、頭部を作成した時にできた型の痕跡と粘土板の両端を接合した痕跡が観察できる。瓦当部の裏面には頭部と接合しやすくするためにつけられた縦方向の櫛目がみられる。瓦当の外周の上面には3か所に直径5mm深さ25mmの刺突痕が残っている。ほぼ頭頂部にあたる刺突痕を中心に75mmと60mmの位置に、瓦当の中心から放射状に穿た



第7図 出土瓦拓影図(1)

れている。その形態からすると、棒状のものを装着した穴とも考えられる。頭部の外面の上部に長さ15mmほどのへら先でつけられた直線の線描きがある。また、頭部の端部分に、屋根にとり付ける時のものと考えられる穴の痕跡が残っている。

3. 菊丸瓦

棟込め瓦として使われた菊丸瓦である。

9 瓦当面に陰刻の8弁の菊文をつける。胎土は白色で砂はふくまない、また、土練時の粘土の縞が顕著に観察できる。焼成は極めて良好で、外観の色調は灰白色、瓦当面に離れ砂が付着している。全体になで調整がされている。

10 瓦当面に15弁の陰刻の菊文をつける。胎土は白色で砂はふくまず、土練時の粘土の縞が顕著に観察できる。焼成は良好で外観の色調は灰色、瓦当面に離れ砂が残る。全体になで調整がなされている。

11 瓦当面に16弁の陽刻の菊文をつける。胎土は灰白色で砂をふくむ、土練時の縞がみられる。外観の色調は灰色で焼成は良い。瓦当面に雲母が付着する。瓦当部分は横方向のなで調整、丸瓦部は縦方向のなで調整がなされている。丸瓦部の内面は無調整である。

4. 軒平瓦

12 瓦当中央に三葉の一葉のみ残る。渦巻く唐草文が二反転して止めの子葉がつく、瓦当面には離れ砂と思われる砂が付着する。胎土は白色で砂はふくまず1mm～5mmほどのこげ茶の不正形の粒子がみられる。外見の色調は灰色である。焼成は悪く軟質である。全体に表面が荒れて調整度は観察できない。瓦当の上面は瓦に向かって縁どるように下がっている。

13 瓦当面に太い唐草文を付ける。14と同じ文様であるが13の方が線が細い。胎土は灰色で砂をふくまず、黒色の瓦片のような1mm～5mmほどの粒子をふくむ。瓦当面の下部分の間に若干みられる砂が離れ砂の可能性がある。平瓦部の下面は無調整、その他はなで調整がなされている。瓦当部の上面は瓦当面向かって縁どるように下がっている。

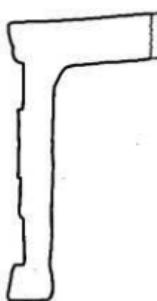
14 瓦当面に13と同じ太い唐草文をつける。13より唐草の線が太くしっかりしている。瓦当面に少し砂が付着しており離れ砂の可能性がある。瓦当部と平瓦部の角がとられ瓦当面向かって下がっているが、顕著でない。全体になで調整がなされている。平瓦部の上面は縦方向のへら調整がされている。胎土は灰色で砂をふくむ、焼成は良いがやや軟質、外観は灰黒色を呈する。

15 瓦当の中央に6弁の菊文状の文様をつけ両側にあまり巻き込まない唐草文がつく、焼成が悪く調整度、離れ砂等は観察できない。胎土は灰白色で砂は少ない。外観は灰色。

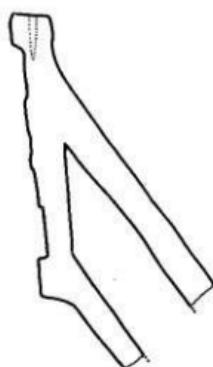
16 瓦当面に文様がつかず、瓦当の縁も丸く作られていて特異な軒平瓦である。胎土は灰色で砂が多く焼成は良い、外観の色調は灰色である。瓦当の周囲と平瓦部の上面はなで調整がなされ、平瓦部の下面は無調整である。

17 瓦当中央に城主の本多氏の家紋である立葵文をつけ、その脇に二反転の唐草文様をつける。胎土は灰色で砂をふくみ、焼成はすこぶる良好で陶器質である。外観は灰色を呈する。全体に砂が付着し、瓦当上部が瓦当面にむかって下がっていて、横での調整がされている。

5



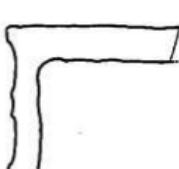
8



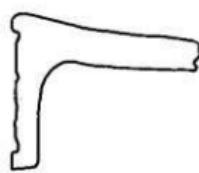
9



10



11



第8図 出土瓦拓影圖（2）

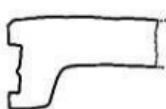
12



13



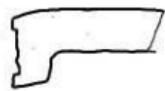
14



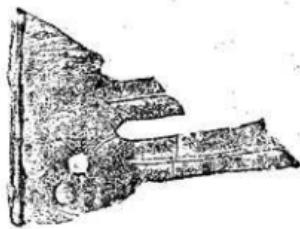
16



17



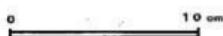
19



15



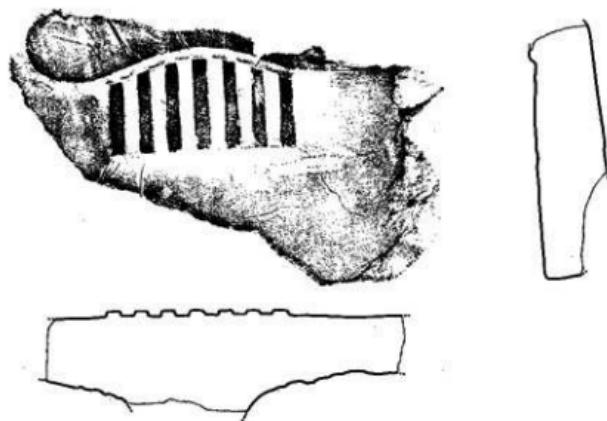
第9図 出土瓦拓影図(3)



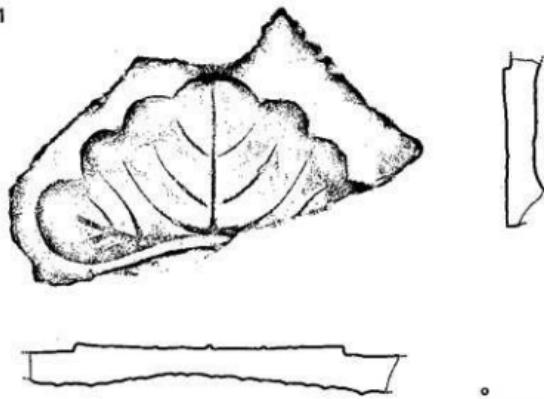
18



20



21



第10図 出土瓦拓影図(4)

18 瓦当中央に櫛松文をつけその横に唐草文をつける。胎土は白色で砂が頗る多く焼成は悪い。外観の色調は黒色である。瓦当面の横には刻印が押されている。

5. 鰐瓦

19 鰐瓦のひれと考えられる瓦である。胎土は灰白色で砂をふくむ、焼成は良い、外観の色調は灰白色である。へらにより縦方向にV字状に長く平行に区画線が作られ、さらに残った平らな部分の中央にへら書きによる直線がひかれ、鰐のひれを表現している。内面は無調整その他はなで調整がされている。瓦を装着する時のものと考えられる直径1cmほどの穴が一つ開けられている。

6. その他の瓦

20 7本齒の櫛松文がついた瓦で、棟の端についた鬼瓦と考えられる。胎土は灰色で砂をふくむ、外観の色調は灰色である。焼成は普通である。裏面に把手の跡と考えられる痕跡が残る。表面の文様部分には砂が付着し、その他はへらみがされていてすべすべしている。

21 表面に櫛松文の松部分がつく、文様面には型の木目が残る。胎土は灰色で砂が少なく焼成は非常に良い。外観の色調は灰色である。文様周囲はなで調整がなされ、裏面は先の丸いへらで調整されている。20と同じく建物の棟端についた鬼瓦状の家紋瓦の一部と考えられる。

7. その他の遺物

その他に陶器類、銅鏡等が出土している。

特に、本丸南斜面から出土した、焼塩壺は「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印がある。この刻印から承応3年(1654)～延宝7年(1679)頃に作られた古手の焼塩壺と時期が特定できる貴重な遺物である。

第3章 まとめ

今回の調査は、城郭の中心である天守台の解明と本丸南斜面の石垣の解明を目標に掲げ進められた調査であった。天守台部分については戦没者慰靈殿の移転等の関係から、天守台の西半のみの発掘調査となり、残念ながら天守建物跡や石垣の検出とその範囲の確認はできなかった事は残念である。しかし、天守建物に関連する可能性が考えられる擺え石や石列の検出、天守台の入口の可能性がある石垣の検出など次年度に実施される計画の天守台の調査の手掛かりが得られた事は大きな成果であった。

本丸南斜面の調査は前年度の発掘調査で検出した石垣を全面的に検出し、その全容をあきらかにする事を目標としたが、南斜面の東側中段部分から5段積みの石垣が検出され、丸石を積み上げた横須賀城独特の石垣の構造を知る事ができる貴重な資料が得られた事は大きな成果である。また、この石垣の上にあった擣から落下した瓦がそのままの形で検出され、自然災害あるいは人為的に破壊された状況が色々と想像される興味深い資料が得られた。

また、本丸南斜面の下場と西の丸の東斜面で新たに石垣と根石列が検出され、今後の調査の基礎資料となると考えられる。

以上のように今年度の発掘調査は、今後の発掘調査や環境整備事業を進める大きな資料が得られた調査であったと総括できる。

〔主要参考文献〕

- 大手前女子学園 1987 『大坂城三の丸跡の調査』
- 坪井利弘 1981 『古建築の瓦屋根－伝統の美と技術－』
- 坪井利弘 1986 『図鑑瓦屋根』

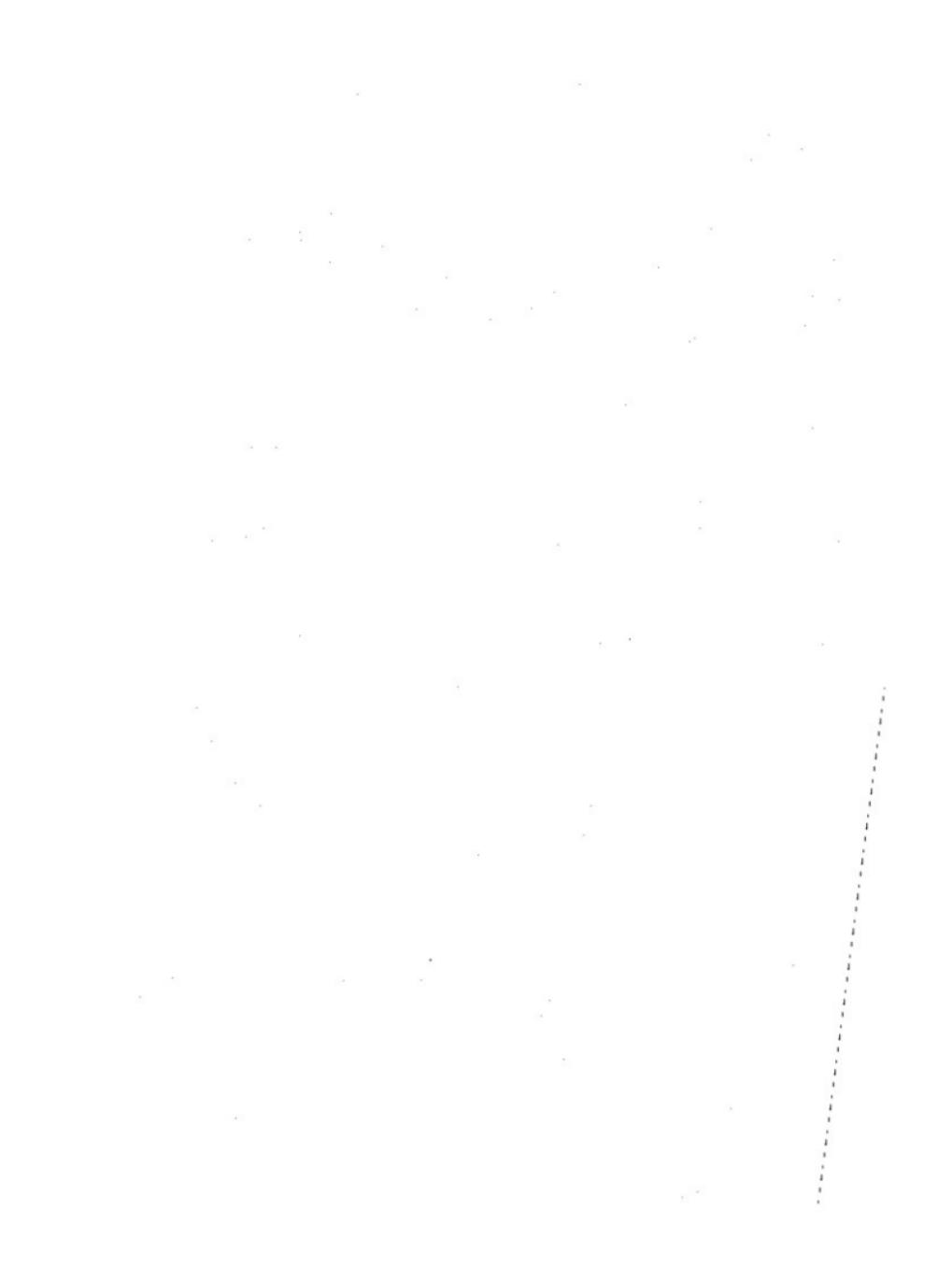


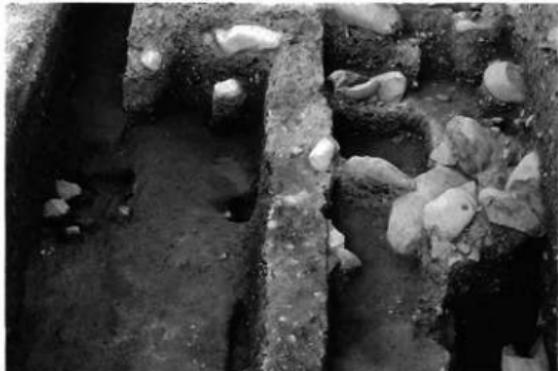
図 版



天守台跡調査前状況（南より）



本丸南斜面調査前状況（南より）



天守台跡
中央掘石
(南より)



天守台跡
中央掘石
抜取り痕
(南より)



天守台跡
F-10区
石列石垣
(南より)



天守台跡
E-9区石列
(東より)



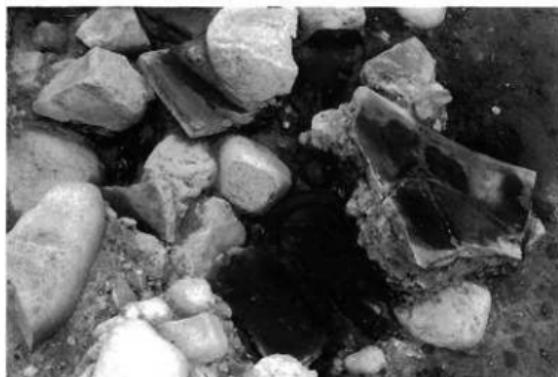
天守台跡
E-9区石列
(南より)



本丸北側
土壠状部分
(西より)



上段石垣前
櫛松文入り
軒丸瓦
出土状況



上段石垣前
壠瓦
出土状況



上段石垣前
壠瓦
出土状況



上段石垣
完掘状況
全景
(東より)



上段石垣
完掘状況
西側
(北より)



上段石垣
完掘状況
西側屈曲部
(西より)



上段石垣
東側部分
根石据方状況
(南より)

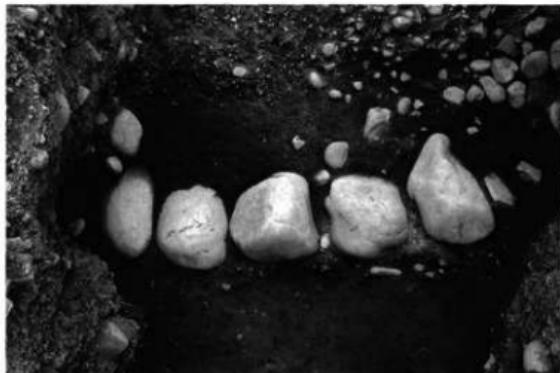


上段石垣
東側部分
根石据方状況
(南より)



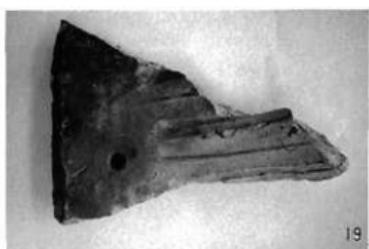
上段石垣
東側部分
根石据方状況
(南より)



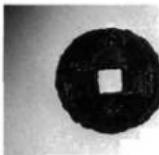




図版
19



24



25

史跡 横須賀城跡 VI

平成元年度保存修理事業概報

平成2年3月31日

編集行
発

大須賀町教育委員会

印刷所

株式会社 三創

静岡市中村町166-1

電話(054)282-4031㈹

